

脳科学から見たモダリティ

原由理枝（早稲田大学）

（酒井弘氏（早稲田大学）、トウエン氏（東京大学）との共同研究）

日本語のモダリティの分類は多岐にわたる。例えば、寺村 (1984)、澤田 (2006)、Takubo (2009)では、「だろう」「はずだ」「にちがいない」「かもしれない」といった蓋然性判断を表すダロウ型モダリティと、「ようだ」「みたいだ」「らしい」といった証拠性判断を表すヨウダ型モダリティに分類される。Hara (2017)および Hara et al. (2018)では、Causal Premise Semantics (Kaufmann 2013)の手法を用いて、(1)のように原因から結果を予想するダロウ型は、形式意味論でいう Epistemic Modality に相当し、条件文の後件と同等の意味をもつが、(2)のように結果から原因を類推するヨウダ型は、条件文の前件と同等の意味を持つことを示した：

- (1) a. 雨が降った。道が濡れているだろう。
b. *雨が降った。道が濡れているようだ。
- (2) a. 道が濡れている。雨が降ったようだ。
b. *道が濡れている。雨が降っただろう。

本研究は、脳の言語処理において、ダロウ型モダリティとヨウダ型モダリティがどのように処理され、両者の意味論・語用論的違いが、どのように反映されるかを明らかにすることを目的とする。本発表では、本年度行った事象関連電位 (ERPs) を用いた実験結果を報告する。

参考文献：

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版

澤田治美 (2006) 『モダリティ』 開拓社

Hara, Yurie. Causality and evidentiality. In Proceedings of the Amsterdam Colloquium 2017, pages 295-304, 2017.

Hara, Yurie, Naho Orita, and Hiromu Sakai. Evidentials in causal premise semantics: A rating study. In Proceedings of LENLS 14, 2017.

Kaufmann, Stefan. 2013. Causal premise semantics. *Cognitive Science* 37. 1136-1170.

Takubo, Y. 2009. Conditional modality: Two types of modal auxiliaries in Japanese. In B. Pizziconi & M. Kizu (eds.), *Japanese Modality: Exploring its Scope and Interpretation*, Palgrave Macmillan.